

2021年4月18日復活節第3主日説教

司祭バルナバ菅原裕治

旧約聖書 ミカ書4章1節—5節
使徒書 使徒言行録4章5節—12節
福音書 ルカによる福音書24章36節b—48節

本主日は、復活節第3主日です。引き続き、教会の信仰にとって大切な、イエス様の復活について、ことに「ルカによる福音書」の復活の記事から学びます。

このイエス様の復活ですが、四つの福音書でそれぞれ記述が異なっています。改めて確認してみますと、最初に書かれたと仮定される「マルコによる福音書」には、イエス様が復活された姿は描かれていません。イエス様を納めた墓が空虚であり、白い衣を着た若者によって、イエス様が復活され、弟子たちより先にガリラヤに行かれ、そこでお会いできるという指示だけが語られます。しかし、そのことを目撃した、告げることを託された女性たちは、誰にも何も言いませんでした。彼女たちの姿は、すべての弟子たちがイエス様に従うことに失敗したという、マルコ特有のテーマを完成させたのでした。物語は、弟子たちが誰も復活したイエス様に出会わないまま終わるのです。ただし、全体構造からみるとそう単純でもないのですが、その点についてはまた別の機会に触れたいと思います。いずれにしても、マルコは、復活したイエス様の姿を描かないことを通して、復活が人間の理解を超えた出来事であることを告げているといえます。

「マタイによる福音書」には、復活されたイエス様と11人の弟子たちが会う短いお話が描かれています。場所はガリラヤであり、約束の山の上です。弟子の数12人の12という数は聖書の中で象徴的な意味を持ちます。しかし、マタイは、その重要性を超えて、自死したイスカリオテのユダを弟子の数から減らしています。そして、物語は、復活されたイエス様が、弟子たちにいわゆる大宣教指令を出して終わります。

本日の「ルカによる福音書」では、物語は長くまた複雑になっています。墓が空虚であるお話の後、復活されたイエス様は、まずエルサレムに近いエマオ途上で二人の弟子たちに突然現れます。その後エルサレムで11人とその仲間たちに出会っています。11人とありますので、ルカもおそらくイスカリオテのユダを数から減らしたのでしょう。しかし、「その仲間」と加えて記述しています。ルカでは弟子として派遣される人数が、12人限定されず、72人という記述（ルカ10:1、17）があることと呼応しているのだと思います。この11人とその仲間たちに、復活のイエス様が現れた場面、それが本日の福音書の箇所です。

最後に記されたとされる「ヨハネによる福音書」では、復活の物語はかなり長く、また独自の物語も多く記述されています。エルサレムで、墓が空虚であることを告げるお話の後、復活されたイエス様は、まずマグダラのマリアに現れます。マリアは弟子たちにそのことを告げるのですが、弟子たちは、その告知を無視したかのように、家に隠れています。しかし、その弟子たちの真ん中に、復活されたイエス様の方から現れるのです。また他の

福音書にはないトマスのお話が続き、さらに復活されたイエス様は、ガリラヤ地方に近いティベリアスでも7人の弟子たちに現れます。そして、イエス様とペトロとの対話、そして、イエス様の愛する弟子についての記述もあります。そしてヨハネは、そもそもこれら復活を含めた全記述が、イエス様を信じて命（永遠の命）を得ることであると目的を明記しています（ヨハネ20：31）

補足として、福音書ではありませんが、パウロもイエス様の復活について「コリントの信徒へ手紙一」で記しています（1コリ15：3-8）。そこにある記述は、文書の成立年代から言えば、どの福音書の記述よりも古いものです。また、福音書のようなお話の形ではなく、箇条書きのような形をしています。パウロは、この記述を自分自身が受けたもの（直訳すれば引き渡されたもの）と語っていることも特徴です。この記述から推測できることは、イエス様の復活について、福音書として物語化される以前に、定型句化した文言があったのであろうということです。

これらからわかることは、『聖書』が、イエス様の復活について、異なる記述を並置しているということです。復活したイエス様が現れた場所も、パウロの受けた伝承では記述がなく、ガリラヤ（マルコ、マタイ）とエルサレム（ルカ）、そしてその両方（ヨハネ）と別れます。どうしてこのように何種類もの記述が発生してしまったのか、その原因を明らかにすることは困難です。どの文書も客観的な資料となるような視点で、イエス様の復活について記述していないからです。

しかし、なぜ並置されているのか、その理由は、明らかです。それは、何が起こったかではなく、何を信じるかが大切だからです。その意味では、最後に記されたヨハネが、もっとも明確にその目的を示しています。また、もっとも古い伝承を受けとったパウロも同じです。パウロは、自分が出会い、回心する契機となった復活のイエス様が、どこでどのような姿であったかを記述するのではなく、復活を信じることの重要性のみを語っているからです。おそらく福音書という物語を記述したほかの著者たちも同じであったと思います。それぞれ、イエス様の復活について、より分かりやすく物語ろうとしているのですが、それはより多くの方が、イエス様の復活を信じてほしいと願ってのことだと思えます。

さて、これらのことを踏まえて、本日の福音書を見ますと、本日の部分は、「**イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた**」という記述ではじまります。聖書日課では省略されていますが、「**こういうことを話している**と」という記述がその前にあります。それは、エマオに向かっていた弟子二人が、偶然出会った人物をイエス様だと認識し、エルサレムに戻って11人とその仲間たちに合流した話の続きであることを示しています。24章25節は、「**二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した**」となっています。ただし、「**こういうことを**」という言葉だけでは、お話自体のつながりが、同じ場面なのか、場面が変わったのか不明瞭です。新しい「聖書協会共同訳」では、「**こう話している**と」と訳しているのですが、同じ場面ととらえているようです。ここでは、場面が変わったことと前提します。つまり、次の場面は、偶然でも単なる連続でもなく、イエス様の方から弟子たちに会いに行かれたということです。

36節にある「真ん中に立ち」という表現は、ヨハネによる福音書の記述と似ています。しかし、原文の細部（前置詞）は異なります。ただし、「あなたがたに平和があるように」という部分は、原文でも一字一句同じです（二単語ですが）。ここにある「平和」は、シャロームの訳語であり、単なる挨拶の言葉とも考えられます。しかし、「ルカによる福音書」の著者は、イエス様の復活とは、平和と結びついている事柄であると暗示しているとも考えられます。そのことについては、後で触れることにします。

物語はその後、イエス様の復活された体が、肉も骨もあり、実際に食事もされたと展開します（ルカ 24：38-43）。そこでは復活とは何かという問いに対する答えといえます。しかし、大切な事柄は、その後続く部分です。イエス様自らの口で、復活という出来事が「律法と預言者の書と詩編」に記された事柄の実現であることを示されるからです。「律法と預言者の書と詩編」とは、最初の教会の人々にとって、『聖書』であることを意味します。このような描写の背景にある事柄は、最初の教会の人々が、イエス様の復活の出来事を、単に見た通りや感じた通りに理解したのではなく、『聖書』に基づいて理解したことを示しています。それは、なぜ、メシアが戦わずしてただ苦しんで死んだのか、またその死は終わりではなかったのか、復活という出来事に結び付いたのか、それらを理解するための鍵を、『聖書』から導き出したということです。ことに「イザヤ書」53章1から12節と、「ホセア書」6章2節から導き出したのであろうと思います。

復活という概念、ことに各個人の復活という概念は、先週触れました通り、そもそもユダヤ教にはありません。ユダヤ教では、イスラエル・ユダヤ人であること自体が、主なる神の恵みによって選ばれ、常に愛されている存在、言い換えれば救われている存在に他ならないからです。しかし、イスラエル・ユダヤ人は、また地上で多くの苦しみを経験する民であるという側面も持ちます。それゆえ、その選ばれた苦しむ民というアンビバレントな姿を通して、主なる神様を信じるということが、どういうことであるかを示していると言えます。また、そのこととは別に、苦しむ選ばれた民という姿は、未来の主の日あるいは終わりの日において、主なる神様は、信じるものに必ず報いてくださるという信仰にもつながります。そして、その終わりの日とは、イスラエル・ユダヤ人だけのものではなく、彼らを模範、媒体とした、すべての人間の救い、言いかえれば主なる神様によるまことの平和を意味するという理解へと発展するのです。本日読みましたミカ書4章3節は、そのことを示しています。「主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」。この箇所は、まことの平和とは何か明確にしている箇所といえます。主なる神様を信じることを通した、まことの世界平和です。そして、誰が見てもわかる通りに、この記述はわたしたちの国の憲法の背景となる概念でしょう。

イエス様の十字架と復活の出来事は、この『聖書』がイスラエル・ユダヤ人を通して示し続けてきた、まことの平和の延長線上にあります。それゆえに「あなたがたに平和があるように」と語り掛けて、弟子たちの真ん中に立たれた姿は、単なる挨拶であることを超えて、その復活の姿を信じるのが、まことの平和をもたらす歩みへとつながることを意味していると言えるのです。ルカは、イエス様の復活とは、世界と歴史に『聖書』に裏付

けられた、そのような平和をもたらす出来事であると伝えているのだと思います。

ユダヤ教の人々にとって、「律法、預言、諸書」が『聖書』という存在に相当しますが、わたしたちは、「旧約、旧約続編、新約」が『聖書』です。しかし、世界の始まりを、主なる神様が「よし」とされた世界と前提している点は、共通しています。それゆえ、『聖書』を通して、主なる神様を信じることは、いずれそのような状態に世界が戻ることを、主なる神様が望んでおられると信じることでもある、という点も共通しています。そして、わたしたち教会に連なるものにとっては、これらすべての事柄、つまり最初から最後まで、イエス様の出来事に結び付いているのです。そして、イエス様の出来事・復活を信じるからこそ、『聖書』に記されたすべての事柄が、より鮮明に理解できるのです。

「ミカ書」にあるような平和な現象は、まだこの世界には実現していません。それは、終末の時の情景であるので、実現していないは当然といえますが、わたしたち、主なる神様を信じるものが、忘れてはいけない目標です。戦争の世紀といわれた20世紀が終わり、21世紀となりましたが、多くの戦いや紛争があり、今も行われています。戦いの仕方を学ばないどころか、20世紀初頭と同じように、新しい戦い方が用いられ、従来型の戦い方を凌駕したともいわれています。わたしたちの国に対しても、つねに様々な力の脅威があります。それでもわたしたちの国では、ほかの国々や地域と比較すれば、安全に過ごすことが可能となっています。それは主なる神様の恵みではなく、様々な作用を用いてわたしたちを守る人々がいるからです。また自由と民主主義が守られているからです。その意味では、わたしたちは、日本という極めて穏やかな国にいるからこそ、この聖書の「平和」に関する記述を、ゆっくりと学ぶことができるとも言えるのです。しかし、それは、それだけわたしたちの教会の責任が重いということの意味していると思います。

『聖書』、そしてイエス様の復活が示すまことの平和は、現在、紛争の中にある地域の人々にとっても、目標であり希望です。しかし、今、穏やかな地域にいるわたしたちの教会こそ、まことの平和がなんであるかを、少しでも具体的に示さなければならないのです。それを示す手段は、礼拝であり、祈りであり、信徒のつながりです。今、コロナ禍のために、その活動はかなり損なわれています。しかし、まだ赴任したばかりのため、多くのことはわかりませんが、わたしたちの東京聖三一教会では、電子メールやファックスを用いて連絡を取り合うことを通して、交わりが途切れることなく、むしろ礼拝再開と親しい人との再会への思いが強くなっていると思います。

今経験しているコロナ禍のあと、わたしたちが目指すべき目標は、過去の今まで通りの時に戻る未来ではなく、イエス様の復活が示しくくださる世界の平和に近づく未来でありたいと思います。そのためにこれからも教会を大切にして、ご一緒に歩み続けたいと思います。